

「賭博者」(ドストエフスキー)

ドイツのさる温泉場のホテルにロシア人の將軍一家が滞在してゐた。亂脈らんみやくな生活故に家計が破綻してゐた將軍は、同宿のフランス人貴族に巨額の借財があつた爲、ロシアにゐる富豪の伯母が死んでその遺産が相續出来る様になる事を願つてゐた。處が、或日、重病の筈の伯母が突如元氣な姿を現して、温泉場のカジノに乗込み、ルーレットに手を出して賭博の魅力に嵌り込み、財産を蕩盡たうじんして了ふ。かくて遺産相續どころの騒ぎではなくなつて、當ての外れた將軍一家やその取巻きの間で様々の悲喜劇が展開される事になるのだが、屢々しばしば指摘される様に、この作品には作者の自傳的色彩の濃厚な、戀愛と賭博といふ二つの要素がふんだんに盛込まれてゐて、それが頗る興味深い。

作品の語り手は將軍家の家庭教師のアレクセイといふ青年で、將軍の義理の娘で美貌のポリーナを熱愛してゐる。處が、氣位が高いポリーナは氷のやうに冷酷な態度を示し、男を矚なぶり者同然に扱ふ。アレクセイは女に對し愛憎の二律背反の感情のありつたけを曝さらけ出す。彼は云ふ、「ぼくにとつては、あなたから奴隷扱ひされるのが快樂なのです」、「たしかに、屈辱と卑下のどんづまりに快感がありま

す、けれども、「ぼくいつかあなたを殺しますよ」、「もう幾度となく、あなたを袋だたきにしてやりたい、片輪にしてしまひたい、絞め殺してやりたいといふ、矢も盾もたまらない欲情を感じたものです、しかし、貴女が「たつたひと言」、僕に「谷底へ飛び込めと命じたら」、「ほんたうに飛び込」むでせう。

そんなアレクセイにポリーナは金を渡して、それを元手に賭博で大金を稼いでほしいと頼む。ポリーナも是非にも金が必要な窮境に立たされてゐたのだ。アレクセイは賭博場に赴き、勝つたり負けたりを繰返す裡に、賭博の魔力に取憑かれて行く。結局、大金を儲けて女に金を渡すと、男をかはゆく思つたポリーナは「ただでは受け取れない」とて一夜を共にした翌朝、アレクセイの顔に札束を投げつけて去つて行く。

アレクセイはその後も賭博による「勝利の快感、自己の威力の快感」、そして何よりも「運命への挑戦」の齎す強烈な魅力の虜となつて、異郷の賭博場を渡り歩き、負債を作つて牢屋にぶち込まれたり、乞食同然の身になつたりして、その日の食事にも事缺^かが、それでもなけなしの持金を賭けるぞくぞくする快感に激しく身を震はせるのであつた。

ドストエフスキーにとつては、戀愛も賭博も、トマス・マンの云ふ「人間の魂の深層を大混亂に陥れる行爲」に他ならなかつた。その種の行爲を切掛として、彼の主人公達は常識や習慣や理性によつ

て縛られ守られた「平穩無事の保證」、「二二が四」(「地下室の手記」)の安定した秩序や調和をぶち壊し、自由にして混沌たる「魂の深層」に突入する。トロワイヤの「ドストエフスキー傳」にかうある、ドストエフスキーの主人公達は「われわれより異常な性格の持ち主ではない。われわれがさうありたいと思つてゐながら、できないのであることを彼等はやつてのける、といふだけだ。喉まで出かかつて、つひ口にする勇氣のないことを、彼らはづけづけといつてのける。われわれが意識の暗やみの底に埋めてゐることを彼らは白日のもとにあばきたてていく」、詰り彼等は「あまりにも人間的な、われわれ自身の顔にはかならない」(村上香住子譯)。吾々人間は「最も罪深い者」に對してさへも己れは「同類でない」と斷定してはならぬとホーソンは云つた。ドストエフスキーを讀む時程、その言葉の眞實性を痛感させられる事は無い。(米川正夫譯、ドストエフスキー全集八、河出書房新社)